

福島大学附属幼稚園教職員による上海及び台北の幼稚園視察

浜島 京子^{*a}, 齋藤 和代^{*b}, 星 俊子^{*c}, 遊佐 早苗^{*d}
富岡 美穂^{*e}, 渡辺 文江^{*f}, 大宮 勇雄^{*g}

福島大学附属幼稚園において、2011年度学長裁量経費により海外の幼稚園視察を実施した。訪問先は、一か所は中国上海市であり、本学と交流協定を締結している華東師範大学の附属幼稚園及び同市幼稚園計3園、二か所目は台湾台北市で国立台北教育大学附属幼稚園を含め同市幼稚園3園である。これらの聞き取り調査及び参観による主な結果（各園の概要、施設・設備、活動状況等）と訪問者の感想・考察等をまとめた。今年度は東日本大震災による放射能問題で附属幼稚園も厳しい状況が続いたが、海外の幼稚園視察は、園や自分たちの保育を見つめ直す貴重な機会となった。

〔キーワード〕 福島大学附属幼稚園 海外幼稚園視察 教職員研修 上海及び台北

I. はじめに

2011.3.11の東日本大震災により、本学附属幼稚園においても2011年度の活動に多くの支障が出るようになった。特に放射能汚染の影響は大きく、2011.4.19に文部科学省より発表された、「福島県学校等空間線量率及び土壌モニタリング実施結果について」において、本園の空間線量値が50cmの高さで4.2 μ Sv/hを示しており、当時の屋外活動基準値（3.8 μ Sv/h）を超えるという深刻な事態となった。この数値に教職員もショックを受け、今後の保育活動をどうしたらよいか頭を痛めた。とりわけ私たちを悩ませたことは、今回の放射能汚染による子どもへの影響がどのようなものなのか、ほとんどわかっていないということであった。そうした中で、保護者の不安は高まり、休園者や転園者が増加していくとともに、担任に対して毎日のように相談の電話が入ってきた。私たちとしては、保護者が冷静に判断できる材料を提供する必要があると考え、放射線に関する見識のある人を招いて質問会などを催したり、関係機関に勤める保護者を中心にパネルディスカッションを開催するなどの機会を設けた。さらに、心身の不調がみられる親子に対してはカウンセリングを受けてもらうなどの措置を講じた。

5月末には園庭の表土除去が行われ、線量は約1/10に下がったが、当分は屋外での活動を見合わせる事になり、引き続き屋内でできることを検討しなければならなかった。園長とのクッキングを取り入れたのもそうした状況がきっかけであった。このようにして、特に最初の数ヶ月は教職員が一丸となって必死に子どもや保護者の対応に取り組んだといえる。その後、次第に各方面から様々な支援—福島県ユニセフ協会による大型バスでの郊外遠足無料企画、スポーツクラブのプール提供、地域の銭湯提供（水遊び）、隣接する附属中学校の体育館提供（朝の運動）等々をいただき、

子どもの育成に重要な自然との触れ合いや、思い切り体を動かすことなど実施することが可能になった。（詳細は、「福島大学 東日本大震災復興支援プロジェクト、震災後の保育現場が直面する課題とその対応事例に関する調査研究、Ⅶ 福島大学附属幼稚園の取り組み」⁽¹⁾参照）

しかし、このような状況下において、休む間もなく対応に追われる教職員に疲労の度合いが濃くなる様子が見え、その点も大変気になることであった。そのような時、附属校園に対し、昨年度と同様に学長裁量経費が配分されるとの情報が入った。そこで、今の時期にこそ、教職員が園の運営や自分たちの保育を客観的に見つめ直す機会が必要であると考え、思い切って海外の幼稚園視察の計画を立てることにした。筆者自身、これまでに本学と交流協定を結んでいる北京師範大学及びウイスコンシン大学オークレア校との共同研究^{(2)~(4)}に参加し、それぞれの教育機関等への訪問を通して多くの貴重な学びがあったため、附属幼稚園の教職員もそのような機会をもつことが必要と考えた。訪問先としては教職員が参加できる日程を考慮し、比較的短時間で渡航できる場所、また本学と交流協定を結び、現在交流が行われている大学の附属幼稚園を含めることが望ましいと考えた。その結果、一つには上海市の華東師範大学附属幼稚園を選定し、それを含め、同市の幼稚園を訪問することとした。上海市は2010年のOECD国際学習到達度調査（PISA）において、65か国中1位となった都市であり、その点からも当市の幼児教育視察は興味深いものがあった。また、交流協定校の華東師範大学では本学人間発達文化学類教授・大宮勇雄氏の保育関連書物⁽⁵⁾が翻訳されており、大宮氏を含めた上海の幼稚園訪問は意義深いと思われた。二か所目の訪問先としては、国立台北教育大学で幼児教育を専門としている翁麗芳教授の協力が得られるこ

* a 福島大学人間発達文化学類教授・附属幼稚園長 * b 郡山市立御代田小学校長（前附属幼稚園副園長）
* c 附属幼稚園主幹教諭・副園長代理 * d 附属幼稚園教諭 * e 附属幼稚園常勤講師
* f 附属学校園支援室 * g 人間発達文化学類教授

とになったため、当大学附属幼稚園を含めた台北市の幼稚園を訪問することにした。台湾では、1999年に中部を中心とした大地震を経験しており、その点から防災対策などの情報交換ができると考えた。

以上により、今回は上海市及び台北市の幼稚園各3園を訪問したが、それぞれの園の概要について園長及び関係職員に聞き取り調査を行い、さらに施設設備や子どもの活動の様子を参観した。以下それらの主な内容及び訪問者それぞれの感想・考察を記し、本海外研修の成果等についてまとめていきたい。(浜島京子)

II. 視察の概要

1 訪問先, 日程等

【2011(平成23)年 上海市の幼稚園訪問】

●訪問者	浜島京子・星俊子・遊佐早苗・富岡美穂・渡辺文江・大宮勇雄
●通訳	賀曉舟(南昌航空大学副教授)
12/21(水)	成田国際空港(MU522便)→上海へ
12/22(木)	午前-華東師範大学附属幼稚園(上海市中山北路3671号) 午後-上海市童的梦幼稚園(上海市陽泉路629号)
12/23(金)	午前-上海市普陀区実験幼稚園(上海市杏山路350号) 午後-上海市見学
12/24(土)	上海浦東国際空港(MU523便)→帰国

【2012(平成24)年 台北市の幼稚園訪問】

●訪問者	浜島京子・齋藤和代・星俊子・遊佐早苗・富岡美穂
●通訳	翁麗芳(国立台北教育大学教授) 国遠憲佑(国立台北教育大学大学院生)
1/5(木)	成田国際空港(CX451便)→台北へ
1/6(金)	午前-国立台北教育大学附属幼稚園(台北市和平東路二段94号) 午後-私立長青幼稚園(台北市大安区基隆路二段232号)
1/7(土)	午前-私立君格幼稚園(台北市松隆路9巷23号) 午後-台北市見学 夜-国立台北教育大学教授 翁麗芳氏、翁氏ゼミ生及び通訳・国遠憲佑氏(日本人留学生)との晚餐会
1/8(日)	台北桃園空港(CX450便)→帰国

2 訪問幼稚園の概要

【上海市の幼稚園】

◆華東師範大学附属幼稚園



園長 呉舟氏・補佐 帳金陵氏の説明及び聞き取りより
○1952年設立(大学と同じ)。

○主に本大学教職員の子どもが対象。

○1クラスの人数・クラス数, 教員数

・2~3歳児 20人	} 4クラス	} 各クラス 教員2名
・3~4歳児 25人		
・4~5歳児 30人		
・5~6歳児 35人		

○教職員 60名(教員37名, 全員幼稚園免許有)。

○保育時間は8:30~16:00(通常は16:30頃になる)

10年前から幼稚園と保育所機能を合併, 区毎に早期教育センターを設置し3歳以下も受け入れている。

親はほとんど共働きのため祖父母の迎えが多い。

○国の教育要領をベースにして各市で教育要領が作成されている。全体の20%は各園で特徴的な取り組みを行うことになっている。

○理念にもあるように書画文化を大切にするとともに読書を重視している(閲覧室があり, 子どもは読書が好き)。幼稚園修了までに200語読めるようになる(早い子は1000語)。

○祭日は伝統文化の行事催行。

○年に6回位, 地域住民に園を開放している(主に入園前の小さい子どもが対象)。

○園長は, 現在は現場出身の者(政府から派遣される場合もある)。



◆上海市童的梦幼稚園



園長 何敬紅氏, 部長 陳莉麗, 補佐 曹莉婕氏の説明及び聞き取りより

○園の特徴として, 一つは芸術中心の活動を行っている, 二つには異年齢による活動を取り入れていること。前者については, ①一日の活動の中に導入(音楽・芸術鑑賞含む), ②集団活動での実施, ③午後には, 舞踊, 音楽, 美術, 物作りから子どもが選んで活動。なお, テーマ学習も取り入れており, 例えば春をテーマに歌, 踊り, 絵を描くことなどを行わせている。

芸術に力を入れるようになったのは, 保護者へのアンケートの結果, ピアノがひけることを望むなどが多かったため, それまで普通の幼稚園だったが1994年より芸術中心の特徴をもたせるようにした。なお, 75%は政府が決めた内容で, 25%は各幼稚園で特徴を出すことになっており, それを政府が審査する。上海市では3年毎に市の模範になる幼稚園を32園選定しているが, 当園はその一つに選ばれた。また,

華東師範大学の實習園にもなっている。

- 1クラスの人数・クラス数, 教員数
 - ・3～4歳児 25人—2クラス
 - ・4～5歳児 30人—3クラス
 - ・5～6歳児 35人—4クラス
 - ・混合クラス —4クラス
 各クラス, 教員2名
+養護教員1名(計3名)
- *混合クラスか単一クラスかは保護者が選択。混合クラスは独立能力が高く, 自分たちより低年齢の子どもの面倒もみるなどにより, 親もこのクラスの利点を認めるようになっている。混合クラスは2000年から導入したが, 子どもに兄弟がいないため, 人間関係作りが必要と考えて設置した。当幼稚園は4キャンパス存在するが, 本部(園)のみ, 混合+単一の2種類, 他は混合クラスのみで編成。
- 安全対策については, 警察の指導, ガイドの作成, 安全教育を実施。保護者も来園の際には入園許可証のカードを提示する。なお, 月1回親子活動を実施しているが, 今月は防災のため消防署を見学した。
- 入園に関しては, 試験は面接, 学区域は上海市であれば制限なし。保育料(一ヶ月)は公立幼稚園でも差があり, 800元(特級・市師範32園)—500元(区師範)—200元(1級)—150元(2級)となっている(*1元は日本円13円前後)。
- 保育料は政府に納めるが, 施設・設備費関係は政府が拠出する。

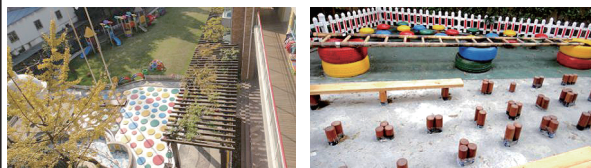
◆上海市普陀区実験幼稚園



園長 邵乃濟氏の説明及び聞き取りより

- 園の理念は, 子ども一人ひとりを大事にして個人的な成長を図ること。特徴としては, 健康教育に力を入れており, 健康生活をベースにした人格形成を目指している。具体的には, ①年齢に応じた心身の安全と健康, ②生活, 健康, 運動を総合的に扱う。③園児中心の運営を重視し, 一人ひとりを公平・平等に扱う, 子どもの個性を重視, 一人ひとりの子どもの未来を重視する。
- 園児数は0～6歳児約650名, 5段階23クラス。教員数は, (0歳は別)最も低い年齢のクラス20人に対し教員3名+保育員1名(生活活動指導, 掃除担当), それ以外のクラス(25名, 30名, 35名)に対し, 教員2名+保育員1名配置。このほか栄養職員7名存在。
- 早期教育センターが設置され, 様々な訓練や親の指導—何をどう食べさせるのか, 着させるのか, 子どもとの関わり方(読書の部屋で一緒に絵本を読む)等を行っている。
- カリキュラムの目標は上海市作成のものによるが, 15%は園の独自の内容を取り入れている。また, カリキュラムの開発には保護者も関わっている。
- 保健に関するガイド本を作成しているが, 伝染病に関しては, 1クラスに2人罹患者が出た場合は学級閉鎖としている。厨房の衛生管理も丁寧に行っている。
- 一人っ子政策の弊害が進んでおり, 過保護の親が増えている。子どものケガにも過度な心配をしたり, 蚊に刺されただけでも騒いだり, 家に帰ると運動もしない子どもが増え

ている。そのため, 筋肉や運動能力の訓練を行う教具や環境を整備している(下記参照)。



- 地元の人との交流, 保護者による教員評価, 健康教育の研究, 幼児心理の専門家との連携も行っている。



【台北市の幼稚園】

◆国立台北教育大学附属幼稚園



園長 范静蘭氏の説明及び聞き取りより

- 1946年設立, 1980年改築, 2005年国立台北教育大学附属校となる, 2012年1月～幼保一元化実施
 - 学習活動は, 語文教育(国語・英語), 健康教育, 美德教育, 総合活動を中心に設定。月曜日は年長クラスにおいて外部から体育の教師が来てリズム活動等を指導する。メインの学習は午前中(学習的活動), 午後は多面的な活動を行い, 隣接する小学校の施設を使用。午前の学習についていけない子どもの個別対応も行っている。一日の主な活動内容は下記の通り。
- | | |
|-------------|---------------------|
| 8:00—9:00 | 登園, 自主的学習活動 |
| 9:00—9:30 | おやつ |
| 9:30—11:30 | 学習活動, 戸外活動, 団体活動 |
| 11:30—13:00 | 半日班—降園, 全日班—昼食・教室整理 |
| 13:00—14:30 | 昼寝 |
| 14:30—15:10 | 片づけ整理, おやつ |
| 15:10—15:50 | 多面的活動時間 |
| 15:50—16:00 | 降園 |
- 3歳～6歳の4クラス・各30名, 教員8名(園長, 教務主任各1名含む), 用務員1名。1クラス2名の教員を配置(園長も担当)。水曜の午後は教員の研修日としている。
 - カリキュラム設定にあたりテーマを設定している(絵本故事類, 生活応用類, 科学観察類, その他等)。
 - 子どもを預けるのを半日にするか全日かは希望によるが, 半日は各クラス2～3名程度。



◆私立長青幼稚園



園長 許欄香氏の説明及び聞き取りより

- 春池文教機構というオリンピックを意識した体操中心の塾や英語塾、ピアノ教室などを手がける組織の中の幼稚園であり、チャイルドセンター（託児中心施設）や小中学生対象の塾（補習）が併設されている。
- モンテッソリー教育を導入。週6時間の英語教育も実施（国際言語センターの英語教師が担当）。3歳からの英語教材が作成されている。
- 半年に1回の健康診断を市の病院で実施。ケガをした場合なども契約している病院に連れていく。保険の費用は国と家庭で負担。
- 半年に2回の避難訓練実施（警報を鳴らし、地震・火事の訓練を行う）。

◆私立君格幼稚園



園長 周麗珍氏の説明及び聞き取りより

- 自立力を重視しており、朝食を食べてこない園児には自分で軽食を作らせたり、他の人の面倒をみること、お茶を入れる、アイロンをかける、花を生けることなども行わせている。
- モンテッソリー教育を取り入れ、具体物の探索、実験、観察を重視している。午前がモンテッソリー教育（基礎能力を養う時間）、午後は子どもの好奇心に基づき異年齢の活動を実施。また、美学、文学、音楽劇などの文化的活動を重視し、詩を作らせたり、本を制作させたりしている。伝統劇（衣服を自分達で創作し製作する）なども行い、老人ホームで披露する。これは、おじいさん、おばあさんを大切にする教育（命を大切にする体験）でもある。園の教育において、接触（関わり）—参加—体験—表現—楽の道筋を重視。
- 園児数は60人、2クラス（特別支援の園児含む、その場合1学級5,000元の補助金が出る）。教員は6名。調理人1名。
- 健康教育、衛生・飲食教育、安全教育（バスで一人残されたらどうするか、乗車・下車の安全、毎月の避難訓練）を実施している。
- 親は教育のパートナーであり、子どもの教具を一緒に作成



する。また、1年に10～12回、親の成長のための研修を行っている。

（浜島京子・渡辺文江他）

Ⅲ. 上海、台北の幼稚園視察における感想・考察

■上海市幼稚園を視察して

上海市の三か所の幼稚園視察で強く印象づけられた第一は、幼稚園に対する公的な格付け評価制度の存在であった。幼稚園の等級には「特級」「1級」「2級」の三種があり、訪問した3園とも上海市から「特級」幼稚園として認証されていた。認証評価の具体的な内容・手続きを聞き取ることはできなかったが、施設設備・カリキュラム・保育者の資格（幼稚園教師にも同様に3等級に分かれた評価格付け制度がある）などに関して詳細かつ厳格な評価がなされていることがうかがわれた。

等級の違いは、施設設備や教材内容の差異を意味しているだけでなく、同じ公立幼稚園でありながら保育料の高低にも直結しているとのことだった（等級が上位園ほど高額）。私は思わず、特級幼稚園の保育料が高すぎないかと質問してしまったが、「保育料に見合った優れた保育を提供している」という回答が即座に返ってきた。

その回答には、自園の保育内容のレベルの高さに対する自信あるいは自負の響きがあった。高度な保育に応じた妥当な保育料であるという明快な説明であった。後刻、ガイドの方からも私立幼稚園と比べて、これら公立の特級幼稚園の保育料は低価格であるという説明も受けた。

1級、2級の園の施設設備や保育内容との間に、問題にすべきほどの落差があるのかどうかはまったく不明である。しかし、一般的な幼児教育制度の原理原則の問題としていえば、「質のよい保育をすべての子どもに保障する」ことは、今日の幼児教育の世界的潮流となっている。社会経済的な弱者やハンディを持った子どもたちに質のよい保育を保障することこそ、社会の健全な発展を可能にするものだという認識が各国政府で広がっている。格付けの評価制度は、競争的で市場原理的な保育制度に親和的なものである。とはいっても、格付け的な評価制度と「質の公平な保障」とがいかなる意味でも両立できないというわけではない。中国の幼児教育が、公平や質に関する国際的な動向をどのように踏まえて、今後の方向性を打ち出していくのか、注目していきたいところである。

二つ目の印象は、保育者が自園の保育内容や自身の専門性について、強い確信と誇りを持っているように見えたことであった。そうした印象を受けた直接の理由は、保育内容についての各園の説明が—とくに童

的夢幼稚園のパワーポイントを使つての説明が圧巻であったが、明快で整然としていたからであろう。

保育内容は、上海市が指示する具体的な活動内容(カリキュラム)に8割方は従いつつ、それに加えて各園独自に開発工夫した活動や教材を用意していると、3園共通して説明していた。カリキュラムが、政府の指示と園の自立的専門的判断という二つの要素から組み立てられているという説明は、その保育内容の正統性を明快に説明するものだった。また、自園の特色を説明する際には、「リテラシー」「科学教育」「芸術教育」「健康教育」など、それ以降の学校教育と共通する概念を使つていて、そこから学校に連続する整然とした理論という印象がもたらされた。

他方、わが国でよく用いられる「遊び」や「友だちとの関わり」というタームはそれほど強調されなかったように思われた。遊びや友だちを通じて子どもたちが学ぶことの中には、生きる上できわめて重要なものが含まれていると日本の保育者の大多数が感じているが、そのあたりが中国の保育者ではどうなのか、その肝心なところは十分に聞き出せなかった。

わが国の幼児教育界では多くの関係者が、遊びや友だちとの交流の意義を実感しているが、それを、学校教育と共通する言葉=概念で説明することはなかなかむずかしい。幼稚園教育における概念=理論と、小学校以降の教育における概念はわが国では明快な連続性を持ち得ていない。そこが、幼児教育の専門性を、学校教育からやや低く区別する理由にもなっていると筆者は日頃感じている。中国の保育者の自負を支えている大きな要素の一つとして、学校教育に順接する理論=言葉があると筆者は感じたが、わが国でも、幼児教育の固有の意義を明快・整然とした形で説明しうる、懐の深い言葉=理論をもたなくてはならないとあらためて思った。

第三の印象点は、飛躍的な経済成長を遂げる社会の大きなエネルギーであった。超近代的なビル群、スモッグにかすむ町並み、「上海は資本主義の街です」という通訳の方の断言、時を惜しむように車が突進してきて信号のある道路ですら横断するのは命がけの交通事情、一人っ子政策の下で我が子のわずかなケガにも過敏に反応する家族、「今の若い人たちは結婚して家庭を持つことより、いかに稼ぐかにエネルギーが向かっている」というガイドの方の嘆き……。巨大な上海市のごくごく一隅を、ほんの一瞬間間見たに過ぎないが、大きく変貌発展する社会の熱気を肌で感じた。幼稚園はそうした熱気を受け止め、活力ある次の世代を育てることに社会から大きな期待が寄せられている場所であった。

日本に劣らないどころか、いやもっと大きなバックアップを中国の政府と社会は幼児教育に向けているように思われた。私たちの社会もやはりそうしていかな

くてはと、そのことを確かめることができる視察であった。(大宮勇雄)



上海市街



華東師範大学附属幼稚園
～クリスマス会

■上海、台北の幼稚園を視察して

12月21日、上海に着いた私は、未来都市のように縦横無尽に張り巡らされた道路に驚いた。また、ライトアップされた近代的なビル街を見て、この地の幼稚園教育について翌日からの訪問に思いを巡らせた。

翌日から早速3つの幼稚園を訪問した。私が特に関心を持ったのは、環境についてと、カリキュラムについての二点である。

1. 環境を通しての教育

どの園も素晴らしい環境に恵まれていた。特に最初に訪問した華東師範大学附属幼稚園では、広い園庭と「分室」と呼ばれるそれぞれの興味関心に応じて活動できる部屋がたくさん用意されていた。分室では、数量・図形・重力など、科学的な興味関心の基に心ゆくまで試せるような遊具が準備されていた。本園でもテレビで大ブレイクした「ピタゴラ装置」を模倣した遊びが見られていたため、素材の使い方や提示の仕方など、参考になることが多かった。しかし、分室にしてしまうことによるデメリットもあると考えた。幼児は繰り返し試す中で、身近な素材の性質を感じ、それらの特徴を捉えて装置作りに生かす工夫を重ねていく。遊びに行き詰まった時、必ずしも同じ興味で集まる幼児からではなく、他の遊びをしている幼児たちの中から意外な意見が出され、そこから新たな展開が生まれることがある。それこそが人的環境=友達とのかかわりの中で進められる遊びといえよう。分室は、個々の興味を追究できる空間ではあるが、そこで与えられるものとのかわりに限定される上、他のことに興味のある様々な幼児とその場がかかわることが困難なように思われた。

2. カリキュラムについて

上海には以前の領域の指導書のような冊子があり、内容が事細かく記されているようだ。上海市では各園とも8割方はそれに従って「授業」(という言葉を使っていた)を行っている。そして残りの2割ほどはそれぞれの特徴を出すように指導されている。そのため、今回訪問した3園でも、それぞれに特徴的な教育を行っていた。華東師範大学附属幼稚園では読書を通じた文字教育、童夢幼稚園では芸術的な活動、実験幼

幼稚園では健康教育である。特に童的夢幼稚園では、保護者からのアンケートを基にピアノや舞踊へのニーズの高まりから、芸術的な活動を特色として打ち出すことになった。芸術活動は保護者の希望で選択できるようになっているようだ。訪問の際、実際にダンスの練習、劇、絵画製作などを見学することができた。ダンスの練習では、数名の女児が音楽に合わせてきっちりと踊っていた。どの活動も自由な表現ではなく、決められたことをいかに模倣するかに重点が置かれているようだった。そのために、それぞれの幼児の思いややってみたいことが見えにくくなっているように思われた。

1月には台北で三つの幼稚園を訪問した。台北では、10年ほど前から教育改革が進められている。日本の影響を受け、小学校においては宗教・総合などの領域が新たに設けられたようだ。ここでは、台北教育大学附属幼稚園（国立）、長青幼稚園（私立）君格幼稚園（私立）を見学した。特に、私立の幼稚園ではモンテッソーリ教育を取り上げ、保護者にアピールしているようだった。

3. 「保護者のニーズに添う」こと

長青幼稚園は、春池文教機構というオリンピックを意識した体操中心の塾や英語塾、ピアノ教室なども手がける大きな組織の中の幼稚園である。同施設にもチャイルドセンターと呼ばれる託児中心の施設や小中学生対象の塾（補習）が併設されている。英語教育を系統立てて（3歳児は発音中心、4歳児は見て読めることなど）行っており、教材の開発にも積極的に取り組んでいるようだ。英語教師は12名も配置されている。その他、図書室や音楽室も用意され、音楽室ではピアノの練習などができるようになっていた。

君格幼稚園では午前中はモンテッソーリの時間、午後は自由にコーナーにかかわれる時間になっているようだ。訪問日は親子行事になっており、幼児が保護者と共に作った詩をそれぞれに発表していた。保護者は詩に合わせて衣装や背景を準備し、中には詩に合わせて人形や紙人形を動かしたり、自身も役になりきって登場したりしていた。幼児の表現力はもちろん、保護者の協力は大変素晴らしいと感じた。ただ、同じようにできない幼児や保護者がいた場合、どのようにフォローするのだろうかという疑問をもたずにはいられなかった。また、園長の説明によると、朝食のサービスを行っているようだ。全園児の2/3は、家で朝食をとらずに登園するという。朝食といっても、10時のおやつを早めることで、全員に提供する。

台北への訪問では、保護者のニーズにどこまで応じることが難しいと感じた。本来あるべき家庭の教育力や生活習慣、幼児の発達について啓蒙していくことも幼稚園や教師の大事な役割ではないかと再確認した。

今回の上海・台北への研修を通して感じたことは、

経済的なバックアップを受け、充実した環境の下で教師たちはそれぞれが自信に満ちあふれ、よりよい評価を得るために切磋琢磨していることだった。しかし、保護者のニーズや政府の評価を気にするがために幼児にふさわしい発達や幼児の心の動きが置き去りにされているようにも感じられた。（星 俊子）



上海 童的夢幼稚園
～芸術活動(ダンス)



台北 私立君格幼稚園
～食卓テーブル

■上海及び台北の幼稚園視察を通して

「上海」や「台湾」という言葉から多くの教育関係者は学力が高いというイメージを持つことであろう。では、幼児教育において日本とどのような違いが見られたのかを述べていきたい。

1 カリキュラムに基づいた保育

日本で言えば幼稚園教育要領が上海・台湾共に存在するが、さらに上海では上海教育委員会による細部にまで教育内容を示す要領で教育内容が定められていた。その中には、時期によりどのような教材を扱うかが示されており、どの園も共通に取り扱わなければならないとされている。1月の時期、どの園にもタマネギの水栽培が保育室に置かれ幼児が観察できるようになっていた。しかし、保育の中の75%はこの要領に基づくが残りの25%は園独自の活動が認められている。幼児の知的活動を重視した活動が多く取り上げられているように強く感じた。教材の工夫はそれぞれに見られたが、「見本と同じように絵を描く」ことであったり、塗り絵のようにある程度決められた中でデザインするものなどが多く見られた。遊びを重視している華東師範大学では空き箱でのお家作りなどのテーマに沿った制作も見られた。また科学的な遊びができる部屋が用意され、時間交代で使用し、鏡や光、磁石などを使っ



華東師範大学附属幼稚園
～色と光の屈折を試す環境



国立台北教育大学附属幼稚園
～保育者作成の教材

て試しながら遊ぶ部屋が用意されていた。

台湾・台北では、モンテッソリー教育が多く取り上げられていた。「遊び＝モンテッソリー」ととらえるほど、自由な遊びの時間は幼児が次々とモンテッソリーの教具を自分で持ち出して来て取り組んでいた。それらの教具だけでなく、教材開発が義務づけられている幼稚園もあった。しかし、ほとんどの園ではモンテッソリーの研修をきちんと受けた指導者がいるわけではない。1日程度の研修で教具を使っただけの保育を行っている。保育者の数も園児7～8人に1人はいるので個々の教材への取り組みには十分に対応できる。

日本の遊びを重視した活動について説明するが、遊びの概念の違いを伝えるのが難しいことに驚いた。「遊びを大切にしている」という考えは上海・台北・日本とも共通であるが、遊びのとりえ方には文化の違いが大きくかかわっているように感じた。

2 親のニーズと幼児教育

上海・台北ともに、共働き家庭がほとんどで保育時間は4時までが通常保育時間であり、その後も延長保育が当たり前である。どちらも、給食と午後のおやつがあり、給食施設が完備されているところがほとんどである。中国には弁当の文化がなく「日本では冷めた食べ物を食べさせるのか?」と驚いていた。これも食文化の違いと言える。台北では、朝食を食べてこない幼児も3割～半数程度いるため簡単な朝食を園で出すところが増えている。10時には全員におやつも出されるのだが、朝食給食も親のニーズの一つとなっている。参観した台北の君格幼稚園では、当日発表会であったが保育室の片隅で親が付き添いながら2,3歳の幼児が朝食をとっていたのが、印象的であった。

もう一つの親のニーズは、「幼稚園で教えて欲しい」という願いであった。上海では、25%の園独自で行う活動の中に親のニーズに応じてダンス、絵画、文学などの芸術の中から選択し活動できるカリキュラムが組んである幼稚園もあった。幼稚園はそれらの才能に長けている教員を採用している。

上海では、幼稚園が4つに区分され、教育の質や内容によって市師範、区師範、1級、2級と区分され、教員も指導に優れた実績のある教員は特級教員とされる。保育料も区分に応じて差がある。

台北においては、英語教育を保育の中で取り上げるために独自の教材開発、音楽教室の選択保育、文字教育などがカリキュラムの中に取り組みされていた。

台北の幼稚園を参観していて気付いたのだが、ビルの中などの立地条件もあるが、「砂場」を持たない幼稚園が多い。台北教育大学の翁先生の話によると「砂場は幼稚園に必ずしも必要ではない」「日本のようにどろんこに汚して帰ったら親から苦情がくる」とのことであった。本園のように「汚して帰った日はたくさん遊んだ証拠です。」という訳にはいかないようだ。

また、翁先生との話から日本と台湾でのままごと遊びの違いに興味深いものがあった。ままごと遊びは、生活を模倣する物であり、幼児の体験や憧れがそのまま遊びに現れてくるものである。台北の幼稚園では、ごっこ遊びの部屋が用意されていて、そこで素晴らしいキッチンセットや洗濯機などを使いごっこ遊びをするのである。本園のように、自分たちで遊びの場を作るということはない。遊びの概念の違いからくるのであろう。実際に台北の幼稚園でのごっこ遊びが行われているところは見られなかったが、遊びを通しての文化比較が今後楽しみである。

上海・台北と本園の教育の違いには上記にあるように遊びのとりえ方によるカリキュラムの違い、文化的背景の違い、親のニーズをどのように受け止めるかにより保育内容の違いがでてくると考えた。(遊佐早苗)

■養護教諭からみた上海及び台北の保健室

1 養護教諭

- ・上海の3園では「看護師(衛生保健免許)」が日本でいう養護教諭の立場で、おもに救急処置をする。台北の3園では、保健室はあるが上海のように看護師の常勤はない。傷病の対応は担任が行っていた。
- ・保健指導については各担任が担当していた。ワークブックなどを活用し学習的に進めている。上海、台北いずれも養護教諭の職務は担任教諭とはっきり役割が区別されていた。
- ・担任を補助する「養護教員(教諭免許ではない)」が各クラスに1名配置され、園生活のサポートや清掃を担当。そのため保育室やトイレも清潔が保たれており、整然とした中で子どもたちが静かに過ごしていた。日本と比較して人的にも設備的にも充実した環境だった。園児たちは多くの目で見守られている印象があった。

2 保健室

- ・上海の3園では保健室が正門脇にあり、登園時に健康チェック(手洗い→体温計測→口腔と鼻の視診→伝染病の有無)をしてから保育室に入るというシステムがあり、文化の違いを感じた。また看護師は担任が必要と判断した園児の病気やケガの救急処置をする。
- ・どの園も保健室の広さは十分に確保され、ベッドや冷蔵庫、健診器具などは充実していた。また、上海



華東師範大学附属幼稚園 同 正門脇の手洗い場の保健室

では各クラスと保健室が連絡を取りあえるよう電話も設置していた。

- ・救急処置では、ケガの処置，病院への移送と付き添い，病気時のベッド休養や観察，保護者への連絡，などほぼ日本と同様であった。

3 保健管理

- ・健康診断の実施について

	本園	上海	台北
回数/年	1	2	2~3
担当者	校医	校医	国派遣医師 看護師

- ・上海では，医療費は市と国の両方で補助し保護者負担はない。日本では子どもの医療費補助は各市町村により異なるので，この点からも中国は手厚いと感じた。任意の医療保険は，各家庭で政府強制保険に加入し，掛け金は園と協議し折半する。
- ・心のケアの対応は，上海では相談室にて信頼できる教諭と園児が話をし，必要に応じて児童心理士に来ていただくそうである。

4 安全管理

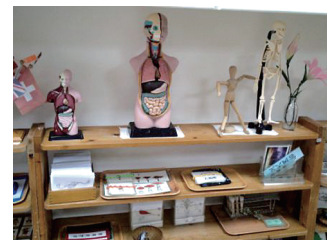
- ・小動物の飼育は日本では教育的に重視されているが，中国ではSARS発症以降中止した。
- ・上海，台北では日本の幼稚園には少ない給食室を配備していた。それだけではなく，免疫力を高めるメニューを作りその情報も伝えるなど，保護者をとても意識して保育しているようである。また，台北の君格幼稚園では，仕事で忙しい父母のために朝食を無償で提供していた。外食文化があらわれていると思われる。
- ・安全教育では，上海童的夢幼稚園では親子活動を取り入れ，消防局の見学を行っていた。これは上海には地震の心配は全くなく，みな集合住宅なので火災訓練を行っているようだ。台北の各幼稚園では，火災と地震訓練を適宜行っていた。多くの犠牲者がでた'99台湾地震や東日本大震災。日頃の訓練が生死を分けたという教訓からも，避難訓練の重要性を再確認した。
- ・飲料水は，各園で給水器が準備されていた。おもちゃも給水器のままごとがあったことに驚いた。

5 健康教育

- ・上海，台北とも，各園のカリキュラムに「健康教育」が組み込まれている。その成果も外部評価（園のランク付け）に反映されていた。午前は種々の学習を，午後は遊びを多く取り入れている。ほとんどが夕方まで保育をするため，昼寝の時間も確保されているなど，園児はしっかり管理されていた。
- ・体の構造や各部位の名称などを，教材を使って園児たちが学習をしていることをこの研修で知った。
- ・家庭での教育はというと，一人っ子政策の影響からか，保護者だけでなく祖父母も送迎や参観など，育



国立台北教育大学附属幼稚園～胃腸炎ポスター



台北 私立君格幼稚園～人体模型

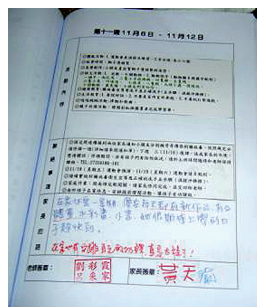
児に参加するのが日常的になっていることが印象的だった。しかし，実際の保護者の意識は子どもにけがをさせたくないから運動を必要とせず，帰宅したら親の管理の下静かに過ごしているようだ。「これが発育の妨げになっている」と教師たちは言っていた。日本でも共働きや少子化が進み，遊びより学力を重視されている風潮があり，同様の問題が出てくると懸念される。

- ・上海実験幼稚園の「心と体の基礎をつくることを重視する」という教育理念の裏には，園に寄せられる期待が大きいため，保護者のニーズを常に意識しているのだろう。また，年齢が低いことや国民性から，日本よりも健康・からだについて重要視されているのではないだろうか。
- ・日本の法規⁽⁶⁾では，幼稚園に保健室は設置することになっているが，養護教諭の配置については努力義務にとどまっている。しかし，幼稚園で職務を遂行していると，心身の発達が途上の幼児期こそ，命をまもる養護教諭の必要性を強く感じる。現在，福島市内の園には本園以外に養護教諭はいない。園が安全で，子どもたちが安心して教育を受けられるよう，専門的知識の習得とその研鑽は必要不可欠で，今回，このような研修の場をいただき，得るものが多かった。（富岡美穂）

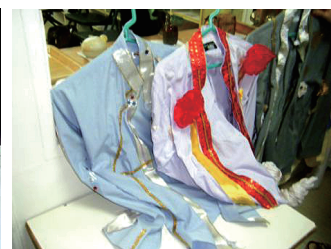
■台北市内の幼児教育を参観して

1 親職教育

幼児教育を進めるにあたっては，保護者との連携が欠かせない。国立台北教育大学附属幼稚園で，保護者



国立台北教育大学附属幼稚園～今週の様子のお知らせ



私立君格幼稚園～保護者手作りの衣装

との連携についてお話を伺った。ここでは、「親職教育」という表現が使われていた。

ここの幼稚園では、個々の幼児の1週間の様子をA4用紙1枚程度にまとめ、各家庭に渡し、家庭での様子を記入して戻してもらっていた。福島大学附属幼稚園でも、年中と年長組については1か月に1枚、家庭での様子を記入してもらい、それに園での様子（遊びの中でどのような学びが見られるかなど）を記入して戻している。続けていくと、保護者は、子どもの良い点や成長した点などが見えるようになる。

ただ、1週間に全園児の様子を見取り、お知らせすることは30名に対して担任が2名でも大変ではないかと思った。実際、とても作成に時間がかかるということであった。

また、私立君格幼稚園では、親は教育のパートナーと明確に位置づけ、親の研修教育に力を入れている。教育活動の中に音楽教育や劇を取り上げていて、劇の際に使う衣装づくりや演じ方の指導なども保護者とともに実施し、子どもたちのための環境作りをしていた。ちょうど、子どもの作った詩を、親の背景製作などの援助のもと、発表するところを見せていただいた。どの子も、堂々と楽しそうに発表している姿が印象的であった。

2 学校評価

学校運営の質に対する地域・保護者等の関心が高まる中で、学校が適切に説明責任を果たすとともに、学校の状況に関する共通理解を持つことにより相互の連携協力の促進が図られることが期待されている。

我が国では22年7月には、改訂版の学校評価ガイドラインが出され、さらに23年11月には幼稚園における学校評価ガイドラインが出され、学校の第三者評価の在り方に関する記述が充実されるなど学校評価の一層の改善が求められている昨今である。

台湾に於いてはどうか。私立君格幼稚園の入り口の上には、目立つ横断幕が掲げられていた。優れた幼稚園として国から教學卓越金質奨という表彰を受けたというものであった。

各幼稚園を案内していただいた台北教育大学の翁先生も第三者としての評価に深く関わっていらっしゃるということであった。国を挙げて評価にとっても熱心だと感じた。

高い評価を受けている今回の各訪問先では、どこも教員が組織として高いモチベーションで幼児教育をしている印象が強い。

反面、評価方法や組織など時間の関係であり深く研修することはできなかったが、順位付けをするのを、そのままこちらの方には取り入れにくいと感じた。

3 学びの環境整備

本園では日頃の遊びの中から発展していったものを劇や発表につなげていく。2月には手作りの音楽劇として毎年保護者に発表している。そのため、毎年個性豊かな発表となっている。



本園の劇（年中児）

本園の劇（年長児）

私立君格幼稚園でも似たようなエピソードを紹介していただいた。

.....

遠くから転園してきた子どもが、地元の文化である人形劇の人形を学級に紹介し、子どもたちは、その人形に大変興味を示した。そこで、人形作りができるような環境を作っていた。

苦勞して作ったもので遊んでいるうちに、劇にも興味を持ち始め、伝統劇の人に講師に来てもらうなど、劇が楽しめる環境を作っていた。劇の衣装づくりも始まった。これは、お父さんの古くなったワイシャツにカラーテープをつけるなど保護者によるリサイクルの手作りであった。教師や保護者の様々な援助を受けて劇を演じることができた子どもたちは、大満足であった。

こうして劇をする楽しさを覚えた子どもたち。祖父母や地域の人にも見せる機会を作った。これがきっかけとなり、祖父母と共通の話題ができたことや、子どもたちにコミュニケーションする力がついた、地域の文化に興味を持つようになったなどの収穫があったそうである。

.....

保育のエピソードから子どもを見取り、子どもたちの思いや願いが発展するように環境を整えたり、援助をしたりして、子どもの成長を綴っていく、本園の「学びの物語」とつながるものがあると感じた。(齋藤和代)

IV. まとめ

福島においては、震災による放射能問題で皆が心身の疲労を抱えていたが、そのような中、本園では学長裁量経費を活用させていただき、海外における幼児教育の実態に触れる機会をもたせてもらった。これにより、新たな気持ちで自分たちの園を見つめ直し、また、今後の保育活動に対する活力を得ることができたと考ええる。

上海及び台北からの帰国後、通訳等でお世話になった方々から下記のメールをいただいた。これらを拝読し、つくづく思うことは、今回の海外研修の成果はな

んと言っても福島大学附属幼稚園が海外との幼稚園交流の扉を開き、国を超えた人的交流を深めることができたことといえるのではないだろうか。

▼上海で通訳をしていただいた賀曉舟先生からのメール

メール及びご撮影した写真はいただき、どうもありがとうございました。上海での二日間、まことに短いですが、先生たちとお出合いはわたしにとってたいへんうれしいことになりまして、これを皮切りに交流を深めていけばいいなと思っております。もし何かお助けになれることがあれば、ご遠慮なくおっしゃってください。

日本ではもうすぐお正月ですが、先生をはじめ皆様どうかよいお年をお迎えください。台湾へのご旅もくれぐれもお大事に。先生との再会を心から楽しみにしております。賀曉舟

▼台北の訪問先アレンジと通訳をしていただいた翁麗芳先生からのメール

おつかれさま。

12月から中国大陸と台湾、大変な研修プランでしたね。異文化にぶつかることはいいことと信じてますので、どうかお互いに応援してまいりましょう。福島、福島大学附属幼稚園にいつかお訪ねいたしますので、よろしくお願いを申し上げます。

ところで、このたび、本当にあいにくのお天気でしたね。今週はよくなりました。日差しが出るほどの晴れた天気ではないですが、雨はやみました。大変でしたね。雨の中の台北旅。ついていなかったね。夏は暑くていやですが、今度は晴れたときにいらしてくださいね。こちらは期末になり、採点に入り、大学はそろそろ休み雰囲気。これから防災教育の報告書読ませていただきます。また色々とお教え願います。国立台北教育大学幼児と家庭教育学系 翁麗芳Wong, Leefong

▼台北で通訳をしていただいた国遠憲佑さんからのメール

こちらこそ、福島の幼稚園の震災に対する対応など現場の方の声を実際に聞くことができ、先生方に感謝しております。私は、震災時は岡山、そして現在は台湾と震災に関する情報はネットを介さない限り入ってこず、またその情報だけでは現地の状況は想像し難いというのが正直なところでした。今回、先生方にお会いして、不安なことはあるものの、前を向き、皆協力し合い取り組んでおられるという印象を持ちました。それは私の幼少期の幼稚園の先生と同じいつでも明るい先生方で、こちらも元気付けられました。ありがとうございます。今回感じたことを自分の周りの友達に伝えていければと思います。

東北地方はまだ一度も訪れたことがないので福島にも是非お伺いしたいです。台湾にはまだまだいいところがあります。またのお越しをお待ちしております。では、先生もお体にお気をつけて。 国遠

幼稚園訪問では、各園の教育方針や保育活動等について話を聞いたり参観したり、またそれぞれの大震災の状況や、互いの防災訓練等についての情報交換なども行い、改めて本園の運営に前向きに取り組んでいく必要性を感じるとともに、国を超えて語り合える仲間がいることの安心感を抱くことができた。

ところで、本視察を通して、幼児教育の環境—特に教員の配置状況において、上海、台北ともに手厚い対応の施されていること（園児20～30人に教員2人）が把握された。日本の「幼稚園設置基準」では「一学級の幼児数は、三十五人以下を原則とする。」⁽⁷⁾とされて

おり、園児35人を教員1人で対応することが可能となっている。このような環境は他国ではほとんど例がないと思われる。改めて、我が国の幼児教育における教員の適正配置等の見直しを強く求めるものである。

他方、上海、台北では幼稚園が学校化している状況（教員等の指導の下、知識・技能を習得させる）が見受けられ、日本が重視している園庭—子どもが自然と触れ合い、友達と関わりながら自分たちで遊びを創り出し、自ら様々な発見や気づき、習得をしていく場—のあり方についてはさほど関心が向けられていないように感じられた。今後はそれらの違いについて議論の場が作られるとよいと思う。なお、訪問した幼稚園の活動に見られた、伝統文化を取り入れ衣装作りも含めた劇の創作、保護者も参加する活動発表会、料理（軽食）作りや縫い物の実践、異年齢集団の重視等は今後の本園の活動を考える上で参考になり、視野が広がられた。

福島大学附属幼稚園において、2011年度は自園の活動が大きく制限されたが、多くの支援や協力をいただき、子どもたちは比較的楽しく過ごすことができたと思われる。しかし、自ら働きかけて生み出す本当の喜びを体感できる環境に早く戻したいと願う。今回視察した上海、台北の幼児教育を振り返りながら、それにに向けた準備を進めていきたい。（浜島京子）

最後に、上海及び台北の幼稚園訪問にあたりお世話になった先生方及び国遠さんに厚く御礼を申し上げます。また、学長裁量経費を配分していただいたことに深謝いたします。

註

- (1) 福島大学附属幼稚園, VII 福島大学附属幼稚園の取り組み, 福島大学 東日本大震災復興支援プロジェクト 震災後の保育現場が直面する課題とその対応事例に関する調査研究, 57-93, 福島大学人間発達文化学類人間発達専攻子育て支援クラス・福島大学附属幼稚園発行, 2011年
- (2) 庄司他人男他, 地域文化と学校教育との相互関係に関する研究—日中両国の比較研究—, 1-83, 福島大学教育実践研究紀要第28号・別冊, 1995年
- (3) 白井・庄司・浜島・森他, 第三部 日・中・米大学間協力研究の成果と展望, 21世紀の教師教育を考える 福島大学からの発信, 127-185, 福島大学教育学部50周年記念著書刊行会編, 八朔社, 2001年
- (4) 白井嘉一他, 日米における教育実習制度ならびに内容・方法の実証的比較研究, 1-197, 平成11年度～13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)2)研究成果報告書, 2002年
- (5) 大宮勇雄, 保育の質を高める—21世紀の保育観・保育条件・専門性—, ひとなる書房, 2006年
- (6) 学校教育法 第三章幼稚園 設置基準 第二章第六條, 第九條四
- (7) 文部科学省令第三十五号 幼稚園設置基準 第二章第三條